



ニュースレター

令和7年度 第1号

発行日 令和7年9月1日
発行者 舞鶴市乳幼児教育センター

乳幼児教育の質の向上ニュースレター

舞鶴市保幼こ小の架け橋プログラムがスタートします

令和7年度は、これまでから取り組んでいる公開保育やドキュメンテーション等の研修については継続し、新たに「乳幼児教育の基礎・実践研修」を企画しました。ぜひ、ご参加ください。

さらに、保幼小連携に関する取組も「舞鶴市保幼こ小の架け橋プログラム」（以下、「架け橋プログラム」という）と名称を変更し、さらに充実することを目指しています。

この「架け橋プログラム」では、本市の特徴でもある架け橋協力園校での5歳児と1年生の架け橋活動をさらに充実させながら架け橋期の教育・保育の充実のため、3年間をかけて、モデル園校（三笠小学校 橋幼稚園 うみべのもりこども園）においてカリキュラム案を作成し、各架け橋協力園校に広めていく予定です。

また、乳幼児教育、学校教育、架け橋期の教育、それぞれが充実するように、架け橋コーディネーターや指導主事が各園校をサポートしますので、引き続き、ご活用ください。

舞鶴市乳幼児教育ビジョンの基本方針「主体性を育む乳幼児教育の推進～みんなでつながり育む舞鶴のこども～」の実現に向け、乳幼児教育と小学校教育をつなぐ架け橋期の保育・教育の質の向上を図るため、保幼こ小架け橋プログラムを実施します。

保幼こ小の架け橋プログラム

架け橋期のカリキュラム作成

- 保幼こ小架け橋プログラム検討会議の設置
- モデル園校によるカリキュラム(案)の作成
- 架け橋協力園校（連携協力園校）による架け橋活動（連携活動）の充実
- 保幼こ小架け橋研修（保幼小連携研修）の実施
- 保幼こ小架け橋コーディネーター（保幼小接続コーディネーター）等による訪問サポート
- 架け橋活動実践ドキュメンテーションの作成（報告書）

令和7年度 舞鶴市 乳幼児教育ビジョン推進事業

事業全体

- 乳幼児教育ビジョン推進事業 報告会・講演会
- 研修ニュースレターの発行

乳幼児教育ビジョンの周知

- 子育て講座、保護者会等での啓発
- ハンドブック(保育者向け)の検討
- 保育者向け研修の実施

保幼小中接続

- 中学校「家庭科」との連携(次世代育成)

乳幼児教育の質の向上研修

公開保育

講師：北野 幸子氏(神戸大学大学院)
田島 大輔氏(和洋女子大学)

- 保育参観
- カンファレンス
- グループワーク

ミニ公開保育

講師：乳幼児教育コーディネーター

- 保育参観
- グループワーク

ドキュメンテーション研修

講師：乳幼児教育コーディネーター

- 講義、グループワーク
- 企画、運営

園内研修

講師：乳幼児教育コーディネーター

- 講義・全体的な計画・保育の環境・ドキュメンテーションほか
- 保育参観

乳幼児教育の基礎・実践研修

講師：瀬 裕介氏(あーと・ねっと作業療法士)

- 講義
- 実践研修

食育研修

講師：伴 亜紀氏(京都府幼児教育アドバイザー)

- 講義

マネジメント研修

講師：猪熊 弘子氏(駒沢女子短期大学)

- 講義
- グループワーク

※保幼こ小架け橋研修については
保幼こ小架け橋プログラムに記載。

保幼こ小架け橋プログラム

保幼こ小架け橋プログラム検討会議

- ・学識経験者：北野 幸子氏(神戸大学大学院)
- ・学識経験者や関係機関等の代表で構成
- ・架け橋期の保育・教育の質の向上を図るため、保幼こ小架け橋プログラムの推進に向けて協議

保幼こ小架け橋協力園校による架け橋活動

- ・5歳児と1年生が年間を通じて、活動を実施

保幼こ小架け橋研修

- ・講義、グループワーク
- ・園校参観

保幼こ小架け橋期のカリキュラム

- ・モデル園校によるカリキュラム(案)の作成
(三笠小学校・橋幼稚園・うみべのもりこども園)

令和7年度 発達支援事業

にじいろ個別支援システム

- 園巡回
- 個別支援検討会議

就園前・就園後の支援

- 集団生活育みルーム「にこにこルーム」
- コミュニケーション育みルーム「ながよしルーム」

発達支援研修

発達支援リーダー研修

対象：保育所・幼稚園・認定こども園等の保育者
講師：清水 里美氏(常磐会学園大学)

全 有耳氏(奈良教育大学)
岡崎 達也氏(京都市児童館学童連盟)

- 講義、グループワーク
- ・乳幼児期の発達と発達障害の理解
- ・特性のあるこどもへの支援スキルの習得
- ・家庭及び関係機関との連携

※京都府保育協会と共催

特別支援教育合同研修会

テーマ：「インクルーシブな保育・教育を目指して」

対象：保育所・幼稚園・認定こども園・小学校

中学校・高等学校・支援学校等

講師：小谷 裕美氏(京都教育大学)
伊藤 俊氏(京都教育大学総合教育臨床センター
学びサポート室)

- 講義、グループワーク

※教育委員会と舞鶴支援学校トータルサポートセンター共催

令和7年度 第2号

発行日 令和7年9月3日
発行所 舞鶴市乳幼児教育センター

乳幼児教育の質の向上ニュースレター

5月15日 中保育所にて「第3回保幼小架け橋研修～保育参観～」を実施しました

今年度から「保幼小連携」を「保幼小架け橋」と改め、「保幼小架け橋プログラム」に取り組んでいきます。

- ・保幼小架け橋活動（連携活動）の実施
- ・保幼小架け橋期のカリキュラムの作成（今年度は三笠小学校・橋幼稚園・うみべのもりこども園でモデル園校として実施）
- ・保幼小架け橋研修への参加
- ・架け橋活動のドキュメンテーションの作成

保幼小架け橋プログラムのねらいは、乳幼児教育の質の向上と架け橋期の教育の質の向上にあります。

本市では、これまでから幼児教育施設類型や公立・私立、校種を越え架け橋活動の充実に取り組んでいます。今後も、架け橋活動を切り口に架け橋協力園校で一層の連携・接続をすすめ、保育・教育の充実を図っていただきますよう、よろしくお願いいたします。

参加園/校

朝来小学校 余内小学校 池内小学校 大浦小学校 岡田小学校
倉梯小学校 倉梯第二小学校 志楽小学校 新舞鶴小学校
高野小学校 中筋小学校 中舞鶴小学校 福井小学校 三笠小学校
明倫小学校 由良川小学校 吉原小学校 与保呂小学校
やまもも保育園 中保育所 朝日幼稚園 朝来幼稚園
永福こども園 岡田こども園 さくらこども園 シオン幼稚園
昭光保育園 相愛こども園 平こども園 橋幼稚園
タンポポこども園 なかすじこども園 中舞鶴幼稚園 東山こども園
ルンビニこども園 うみべのもりこども園 舞鶴こども園
池内幼稚園 倉梯幼稚園 ひばり幼稚園

「学びを深める 学びをつなぐ 保幼小架け橋活動」を目指し、第3回保幼小架け橋研修会～保育参観～を中保育所において実施しました！

架け橋期の保育・教育の充実を図るため、園での保育内容とそのねらい、保育者の関わりを知り、保育の理解を深めるために、中保育所に4歳児・5歳児の公開保育をお世話になり、保育参観を実施しました。

- 1 4歳児・5歳児の保育参観
- 2 グループワークⅠ
- 3 講義「学びを深める 学びをつなぐ架け橋活動」
- 4 グループワークⅡ

「やりたい」と思っている遊びの中で、「こうしたら〇〇になるのでは」と予想する姿や工夫する姿、何度も試す姿が見られました

自立心

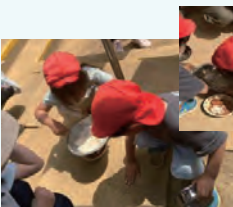
思考力の芽生え

【4歳児の遊びの姿】

泡を作ることが大好きな4歳児たち。泡遊びの中でも、「自分のやりたいこと」をする姿が見られました。

真っ白な強い泡を作りたいと、おろし器で石鹸を削ってボールに入れ、水の量を加減して入れ、泡だて器で手慣れた様子で混ぜて、参加者に自信をもって説明する姿が見られました。

きつと、これまで「どうしたら、じぶんのつくりたいあわができるのか」と何度も何度も石鹸や水の量を変え、試してきたのでしょう。



泡の中に、砂を入れて混ぜて、友達の泥団子の上にかける様子が見られました。大人の発想にない砂を入れて、カフェ・オレの色にしているところに豊かな発想を感じました。



色水に石鹸を入れると色の変化が見られ、繰り返し試行錯誤しながら「なんだろう」と考える姿や、緑のテントの下と空の下で見る色の違いなどに気づく姿もありました。

部屋では、いろいろな食べ物を作っていました。

たくさんある材料から、自分の作りたいものにあった材料を選び、作ったジュースやお菓子をお店屋さん並べます。

保育者の言葉がけは、4歳児クラスでも5歳児クラスでも、すぐに答えを言うのではなく、「なんだろうねえ」「どうしたらいいかな」と問いかけたり、一緒に考えたりする言葉がけがされていました。

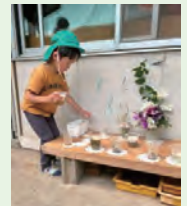


【5歳児の遊びの姿】

5歳児は、園庭でリレーごっこを楽しんだり、泡遊びの中でジュースや食べ物などに見立てて作ることを楽しんだりしていました。

作ったジュースを置きに行こうとしましたが、カップに穴が空いていて、ジュースが漏れていることに気づきます。しばらく考えて、別の容器にうまく移し入れ、白いコースターの上に置きに行きました。

お話タイムでは、色や匂いなど五感を使って感じたことを友達に紹介しました。



「第3回保幼小架け橋研修～保育参観～」

お話タイムでは、見てもらいたいものを見せながら、気付きや思い、考えを自分の言葉で伝えようとする姿が見られました

言葉による伝え合い

部屋では、マクドナルドやさんごっこでメニューがわかるものを机に立てたいと、女の子二人がガムテープを貼ったり、立てる場所を変えたりしていました。しかし、そのうちに棒に止めていたところからメニューの紙が、片方、破れてしまいました。



お話タイムでは、それぞれが遊びでの気づきを話さ中で、担任からその話題が出されました。

「マクドナルドやさん、先生も一緒にいたんだけど、ちょっと…。見せてあげて。直すって言ってしていたら、こんなになっちゃいました。今日何をしたら言ってあげて。」

（「ああ、やぶれた」と繰り返し言いながら持ってくる。）

「なんでこんなことになったん？」

「（びんとしたくて）ぼうをひっぱりあって・・・。」

「この棒は、机の上に立ったの？」

「たったけど、ゆらゆらした。」

「机の上に立ったんだけど、この棒が、うまくまっすぐ立たなくて、壊れちゃったんだって。」

「これは、明日どうするの？まだ諦めずにやるん？」

「うん」

「この棒をまっすぐ立てて、メニューもピツとしたいんやって。何かアドバイスない？」

と、保育者が話題を広げられると、聞いていた他の子から



「こうやって、だんボール、ペタッてはったら、いけるんちゃう。」とメニューの紙をびんと張るためのアドバイスをもらいました。すると、アドバイスをもらった子は、

「そうしたら、ここ（棒のところ）がやぶれるかもしれん。」と、今日破れてしまったことから心配なことを伝えます。アドバイスした子は、もう一度、

「メニューのうしろにだんボールはったらい。おなじおおきさきってのはったらい。」と、手で示しながら詳しく伝え直しました。

最後に、アドバイスをもらった二人は、

「みんながおったらできる。てつだってほしい。」と、思いを伝えました。

〇〇ちゃんに伝えたいという思いを持ち、一生懸命に伝え合い、子ども同士で対話をしていました。困っていることを素直に話す姿にも、自分事としてよく聞き、アドバイスをする姿にも、これまでから友達の話聞いて、一緒に解決してきた自信を感じました。

～参加者の感想より～

◎4歳児さんのメイクアップ屋さんでは、お客さんとして遊びに誘ってくれたり、泡遊びでは泡立ての過程や気付きを話してくれたりしたので、子どもたちの工夫や気付きを直に感じることができました。その中で、4歳児では、大人が介入することで遊びが進み、その経験を積み重ねることで、お友達との遊びにつながっていくということを実感しました。5歳児さんの遊びは、子ども同士でやり取りしながら遊びを進める姿が見られました。振り返りでは、遊びが継続するように、「明日、次はどうすればよいか」と投げかけられました。それが、きっかけとなり、子どもたちから意見がどんどんでました。私も、次につながる言葉がけができるようにしていかなければと思いました。保育参観をさせていただき、明日から、また活かしていきたいと思う学びをたくさんさせていただきました。ありがとうございました。

◎子どもたちがやりたいことを実現できるよう環境が整えてあることやじっくり安心して遊べるような場、空間があることなど、とても勉強になりました。先生方も、遊びに向かう子どもたちの姿を尊重し、見守ったり思いに共感する言葉がけをされたりしておられ、印象的でした。振り返りでは、子どもたちが自分の考えを自分なりの言葉で伝えたり、友達同士で意見を出し合う姿があり、素敵だなと感じました。次の遊びへとつながっていくという意味でとても大切な場だと思うので、私も今回見させていただいたことをもとに丁寧に行っていきたいです。

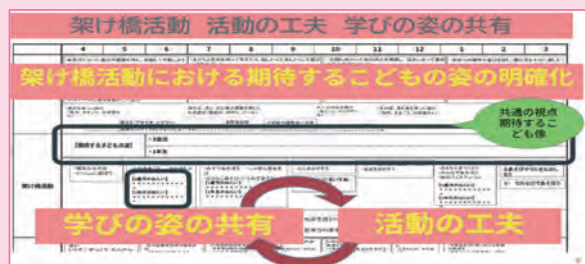


ゆったりとした時間の中で、友達の遊びや活動での気付きをクラスで共有し、アイデアをもらったり、明日自分がしたいことに取り入れたりするなど、子ども達にとって、お互いから学び、視野を広げる時間になっています。

また、お話タイムのあり方がとても自然体で、必要なところで保育者が入りながら、子ども同士の対話ができるようにサポートすることの大切さを感じました。

「学びを深める 学びをつなぐ」
保幼小の架け橋活動の充実に向けて

架け橋活動を充実させるために、期待するこどもの姿を明確にし、その姿を引き出すための4つの視点を意識し工夫すること、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿をいかし学びの姿を共有することを大事に取り組んでいきましょう。



架け橋活動 4つの視点

- ◎こどもの興味・関心（意欲、好奇心など）
- ◎一緒に活動（つくる、対話するなど）
- ◎環境の工夫（教材）
- ◎学びを引き出す関わり（待つ、問いかけの工夫など）

架け橋活動 育ちや学びを見取る手がかり

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」



乳幼児教育の質の向上ニュースレター

「学びを深める 学びをつなぐ」保幼小架け橋活動を紹介します！

春から夏にかけて、各協力園校では、「学びを深める 学びをつなぐ架け橋活動」に取り組んでいただきました。参観させていただいた園校では、事前の打ち合わせ、事後の振り返りを大切にして、充実のための4つの視点を踏まえ、こどもたちが自己発揮できる活動としていただいていた。一部を簡単に紹介します。

中舞鶴幼稚園、中保育所、中舞鶴小学校 架け橋活動で期待するこどもの姿

5歳児：相手の思いを知ったり、自分の思いや考えを伝えたりしながら意欲的に活動しようとする。

1年生：自分の考えたことを伝えたり、相手の考えを受け入れたりして、楽しみながら粘り強く活動しようとする。

1回目

中舞鶴幼稚園、中保育所、中舞鶴小学校の架け橋活動は、中保育所の5歳児が色水遊びをよくしていることをきっかけに、中保育所で色水遊びを通して「何をしたら、こんな色水ができたか」などの気づきを言葉で伝える活動をしようと計画をされました。また、1年間活動するグループも決め、それぞれの園校でグループ名にちなんだバッジなどを事前に作り、期待を膨らませようと相談されました。

1回目は雨天のため延期となり、場所も中舞鶴小学校体育館の周囲に変更になりましたが、どんなものがあればよいかを、こども達と相談され、たくさんの草花の材料、すり鉢とすりこぎ棒、鍋やボール、ビニール袋、小さいチャック付きのビニール袋…といった道具が用意されていました。

今年度初めての顔合わせなので、こどもが自分のグループを意識できるように、保育者・教師は、「グループの人に聞いてみたら」などの声かけをされていました。初めて色水遊びをすることも達もいましたが、手慣れた様子で色水づくりをしている友達の様子を見ながら、自分もしてみようとチャレンジする姿が見られました。

場所もそれぞれに相談して決め、途中で山の方へ草花を探りに行くグループもありました。

「ふりかえり」では、色水遊びが楽しかった、違う園の子や1年生と一緒に遊んで楽しかったなどの感想がどの園校のこども達からもたくさん聞かれました。

その後、保育者から、色水遊びで気付いたことをたずねられると、「さくらのみをつかっていたら、むらさきいろになった」と実物を見せながら、一生懸命に伝える姿が見られました。聞いていたこども達も、食い入るように見ていました。

短時間で活動に取り組んだこともあり、色水に関わる気付きの伝え合いは少なかったため、2回目の色水遊びでは、色水に関わる気づきがたくさん伝えられるように、「はじまりのかい」と「ふりかえり」を工夫しようと事後の振り返りで相談されました。



グッドポイント

興味・関心：よく遊んでいる子も、初めてする子もいたが、色水遊びは親しみやすい遊びで、興味・関心が持てる活動だった。

環境・教材の工夫：初めて遊ぶ子もいる中、材料や道具がどのこどもにも行き渡るように、適当な用意がされていたので、興味・関心がそれぞれに、楽しむことができた。

一緒に活動：基本的に個々に楽しむ遊びであるが、グループで色水遊びをすることで、そばにいる友達の遊ぶ姿を見たり、やり方を聞いたりして、自分の遊びに取り込む姿が見られた。気付いたことについての伝え合いは、それぞれが思う存分楽しめたので、グループでも全体でも、集中が途切れることなく、話を聞いていた。

関わり：1回目は、グループを意識できるような言葉がけを、2回目は気づきにつながる言葉がけをされることで、他園校の友達に聞いたり、気づきをあげたりしていた。

2回目

2回目の水遊びは、グループの友達の顔も分かり、すぐにグループに分かれました。今日の目当てを聞いたあと、1年生の育てた朝顔も本人の了解を得て色水遊びに使ってよいことになり、一緒に朝顔の花を摘みにいく姿も見られました。

やり方が分かり、「このはなでびんくのいろみずがつくれそう」「このいろみずとこのいろみずをまぜたら、きれいないろになる」など予想しながら遊ぶ姿も見られました。

黄色い色水を作ろうと黄色い花をつぶすのですが、なかなか色が出なくて苦労している姿も見られました。保育者が「どうしたらいいかな」と言葉がけをされ、グループで「もっとよくおしついたらいい」「ごりごりしたらいい」と考えて、やってみる姿も見られました。色を確かめようと、ペットボトルに移し替える姿も見られました。

「ふりかえり」は、グループ内で「どんな色水ができたのか。どうやって作ったのか」を伝え合い、グループの代表が全体の中で伝えることにされました。保育者や教師とのやり取りをしながら、自分がしたことや気づいたことを自分の言葉で伝える姿が見られました。集中して、よく聞く姿も見られました。



あさがおとひまわりをいれたら、できました。こうやって、そこにぎゅうとおしつけて、こんないろになりました。（使った道具も持ってきて、やり方も伝えました。）

いろんなおはなでつくりました。あさがおといろんなおはな。ふくろで、もみもみした。

いろんないろをまぜたら、おちやのようになった。ともだちからもらった。（「お花出したら見えるかな？」というアドバイスで、コップに色水を移し替えてよく見えるようになりました。）

「学びを深める 学びをつなぐ」保幼小架け橋活動を紹介します！

さくらこども園、ひばり幼稚園、森の子ら幼稚園、倉梯第二小学校 架け橋活動で期待することの姿

5歳児：相手の思いや考えを言葉にして話し合ったり、協力したりして、活動することを楽しむ。

1年生：自分の考えを持ち、発見したことを言葉にして伝え合いながら活動することを楽しむ。

1 回目

さくらこども園、ひばり幼稚園、森の子ら幼稚園、倉梯第二小学校の架け橋活動は、こども達の興味や関心のある遊びを話す中で、鬼ごっこを楽しんでいることや、夏にキャンプをするのでその取組を始めていることなどを話されたことをきっかけに、1回目は、キャンプのイメージを持ち、キャンプで自分は何をしたいのかを相談し、2回目に、「キャンプをしよう」に取り組もうと、計画されました。

まずは、みんながしたことのある遊びを思い切り体を動かしながらして、仲良くなれるといいなと、こども達に何鬼ごっこがしたいのかをたずねながら、出てきた意見をもとに鬼ごっこを決めてしようと相談されました。

1回目は、グラウンドに集まり、さっそくみんなで遊びたいことをたずねられ、「ふえおに」をすることに決められました。広いグラウンドでしたが、どんどん増える鬼から逃げようと必死に走ったり、挟み打ちのように追いかけてりしながら、最後には全員が鬼になりました。

次は、こどもたちの意見を聞きながら、バナナ鬼、氷鬼をして、楽しみました。



そして、体育館へ。キャンプで遊ぶ様子の写真を見せながら紹介され、みんなで「キャンプをしよう」と話がまとまりました。

1年生が色グループの画用紙を用意して声をかけてくれ、グループに分かれます。集まって、好きなものをつづいて、そこからグループの名前を相談しようと計画されました。しかし、すぐに言えない子もいたので、事後の振り返りでは、動物や果物など好きなもののカテゴリを決めておくとうかかったかも…と意見が出されました。

こども達は、「テントをつくってねたい」「バーベキューをしたい」「マシュマロをやきたい」「かわでさかなつりをしたい」「キャンプファイヤーをしたい」とキャンプで自分のしたいことをそれぞれに伝える姿が見られました。

あるグループでは、こんなことをしたいと話が出たことを、色画用紙に進んでメモする1年生の姿が見られました。

したいことに向けて、各園校でどんなものを用意すればよいかなどを相談し、準備物を持って7月に集まろうと確認して終わりました。



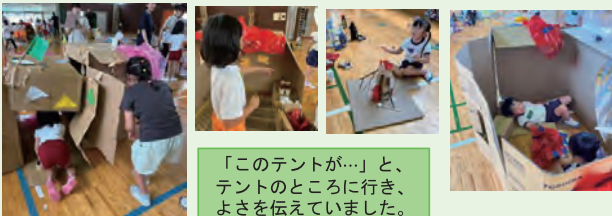
2 回目

暑い中でしたが、風通しをよくしてもらった体育館で、熱中症に気をつけながら、「キャンプをしよう」に取り組みました。

夏にする架け橋活動として、大掛かりなものをすることになったので、自己発揮できるかな、協力できるかな、時間内にできるかな、と心配していましたが、大きな段ボールや筒、ガムテープなどのよい環境と、こどもたちの意欲で、自分たちのしたかったことができ、とても楽しい活動になり、それぞれに満足したようでした。

作る過程で、グループ内でたくさん考えを伝え合うこともできました。

ちょうどよい長さの筒が4本なくて、テントの脚が揃わず、箱を積んで何度も長さを調整したり、グラグラになるところをしっかりとせようと添え木のアイデアを出したりする姿が見られました。どのグループでも、「こうしたら、こうなるのでは」と、アイデアを出して取り組む姿や何度も試す姿が見られ、やっとできた時には、本当に嬉しそうでした。



「このテントが…」と、
テントのところに行き、
よさを伝えていました。

できた頃に、半分ずつのグループに分かれ見て回り、他のグループの工夫したよいところを紹介しました。他のグループのよいところを伝える姿も、その気づきを聞こうとする姿も見られ、みんなと一緒に楽しめた満足感が感じられました。

片付けの仕上げは、1年生と保育者・教師で行いましたが、1年生が自分で考えて片付けをしたり、最後までやり抜いたりする姿が、とても素晴らしかったです。

各園は、作った製作から選んで持ち帰り、園で遊びを広げられました。

グッドポイント

興味・関心：鬼ごっこは、5歳児も1年生も親しんでいる遊びであり、またその場でこども達のしたいことを引き出しながら一緒に考え、すすめることができた。「キャンプをしよう」でも実際にキャンプやキャンプファイヤーをしている園があり、その紹介を少し入れることで、興味・関心をいかし、引き出すことができた。

環境・教材の工夫：2園でされたキャンプの様子を写真で紹介されたことで、キャンプのイメージが広がった。こども達が話し合いのときにも、写真を見に行く姿が見られた。大きな段ボールを準備されたことで、テントを作るときのイメージが持て、また、自然と協力する姿につながった。

一緒に活動：最後に他のグループを見に行くことにより、グループの工夫やよさに気づくことができた。また計画した1回目から2回目までの準備期間にそれぞれの園校で材料を集めるなどに取り組んだことで、こども達に見通しが持て、意欲が高まった。

関わり：こどもが困っていることに共感しながら、考えを促すような言葉がけをすることで、こども達がアイデアを出して作っていた。

乳幼児教育の質の向上ニュースレター

舞鶴市 乳幼児教育ビジョン推進事業 全体会を実施しました

全体会では、令和6年度に実施した発達支援体制検討会議（就学前の発達支援）や、令和7年度の舞鶴市乳幼児教育ビジョン推進事業計画等について報告しました。

さらに、独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 インクルーシブ教育システム推進センター 上席総括研究員（兼）センター長 久保山 茂樹 先生を講師にお迎えし、「共生社会の担い手を育む保育を目指して～多様性を尊重し、安心して自己発揮するために～」と題して、ご講演いただきました。事例を交えながら具体的にお話を伺うことで、より学びを深めるとともに、保育を振り返る機会にもなりました。

参加園

八雲保育園 やまもも保育園 中保育所	朝日幼稚園 朝来幼稚園 永福こども園 岡田こども園 さくらこども園 シオン幼稚園 昭光保育園 相愛こども園 平こども園	タンポポこども園 なかつじこども園 中舞鶴幼稚園 東山こども園 舞鶴聖母幼稚園 ルンビニこども園 うみべのりこども園 舞鶴こども園
--------------------------	---	--

久保山先生 講演

共生社会の担い手を育む保育を目指して
～多様性を尊重し、安心して自己発揮するために～

子どもの姿を肯定的に捉えるということ

○私たちは、しばしば「将来困るから」という理由で、子どもたちに「できないことをできるようにすること」を求めがちではないか。

「できないことがあれば大人になれない」のだろうか。

○「できないことをできるようにするエネルギーや時間」を、「今できていることを豊かにする」ことに割り振りたいと考える。変えるのは子どもではなく、むしろ私たち大人がどれだけ変わるのかということを考えていきたい。

○中学校の発達障害の通級指導教室の先生からは、「学び直し」や「しつけ直し」よりも、「人と遊ぶと楽しい」「コミュニケーションするとワクワクする」といった心の動きを伴う体験が中学校までに必要だということを知った。

支援が必要な子どもも、まわりの子どもも育つ保育

○鬼ごっここの輪に入らず一人で夢中になって遊ぶ子に、保育者は「声をかけない」という選択をした。「この子にはこの時間が必要」だと言える保育者の専門性のスキルは素晴らしい。保育者が、子どもの姿を認め、その子の遊びを保障することと、夢中になって遊びこむ姿は、周りの子どもの興味を引きつける。

○みんなの輪からはみ出ている子どもを困った子と捉えるのではなく、その子の「よさ」や「得意」を認め、そこにしっかりと目を向けていくことが大事であり、それらを軸に豊かな関わりを築くことが、共生社会への一歩ではないか。

子どもが、いま、ここで手持ちの力を発揮できるように

○私たち先生と呼ばれるものは「子どもから学ぼうよ」と思って先生になったのではないだろうか。この原点を思い出したい。どんなに重い障害があろうと、その子は「いま、ここで持ってる力」がある。それをどうやったら発揮できるかを考えるのが私たちの仕事ではないか。

お座りがむずかしいAちゃんの事例

○環境（チャイルドシート付きブランコ）を整えるという大人の発想の転換によって、ブランコに乗り、笑う、声を出す、という「今持っている力」を最大限に発揮することができた。

○子どもを「一生、能力を身につけるために頑張れ続けなくちゃいけない存在」にしてはならないだろうか？ 私たちが少し甘く見守ること、子どもは安心して自分を発揮できるようになるだろう。



先生たちがつながることが大切

○担任の先生が「私が何とかしなきゃ」と、一人で抱え込み、子どもとの関係が「トゲトゲ」していないだろうか？

○担任の先生が少し苦しそうであれば、周りの先生は支えてあげてほしい。職員室での失敗談の共有や、お互いのSOSを受け止め合う「つながり」が、先生の心を緩め、子どもへのまなざしを優しくするだろう。

共生社会の担い手を育む

○幼稚園教育要領の前文にもあるように、将来、多様な人々と協働し、持続可能な社会の創り手となるための基礎を培うことが、これからの保育・教育に求められている。

○共生社会とは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会であるとしている。（平成24年7月 中央教育審議会初等中等教育分科会報告）

○これまでは、どちらかと言えば、障害のある人や子どもが、社会や園・学校に合わせてきた。これからは、社会、園や学校が、多様な人があることを前提に変わっていけるかが問われており、多数派（マジョリティー）が変わる挑戦が必要だと考える。

○保育における方向性についても、これまでは、少数派が多数派に近づくという方向性であり、子どもが努力し、できないことをできるようにすることを目指すという発想であった。これからは、多数派の子ども、保育者が変わるという発想で、子ども理解（多様性を認め合う、得意・良さも知る、共感のまなざし）を深め、保育の見直し（誰もが生活しやすく、学びやすい環境づくり）を行うことで、多数の側がどれだけ変わるかを追求したい。

○保育者が「早くできることは素晴らしい！でも...ゆっくり、丁寧にできることも素晴らしい！」など、多様な価値観をもち、子どもにそれを伝えることが大切ではないか。

私たち大人が「共生社会」を自分の言葉で説明できることが必要
「みんなが大人になる頃は、こんな社会であってほしいんだよ」ということを、子どもたちに伝えていきたい

子どもの視点から保育を見直す

○子どもの特性は簡単には変わらないかもしれないが、保育者の発想や保育を変えることはできるのではないかと。「うちの園・学校は毎年こうしている」に縛られず、一人一人の子どもに応じることを考え、保育を変えることでうまくいく環境を探っていくことが大事ではないかと考える。

○「どうして〇〇できない!」という発想からは、子どもを責めることしか考えられない。「〇〇できるのはなぜだろう?」と考え、どうしたらよいかの手立てを思いつく発想へと転換していくことが大切である。

あの子と私の安心できるつながり

○「できない自分も、SOSも出していいよ。それでいいよ。だいじょうぶ」と感じられる、安心できるつながりをつくるのが大切ではないか。

○保育者の、子どもへの関わり方（気になる子への接し方）が、まわりの子どもたちにうつり（映り・移り）、彼らが共生社会の担い手へと育つための大切なヒントとなる。

○子どもが何かに夢中になっている時、保育者は「横から」近づき、隣に並んで、同じもの・同じ方向を見る。この「隣に並ぶ」姿勢は、子どもの心を「ちょっと温かく」し、安心感を与え、共感の眼差しを生み出す。もしかしたら、支援が必要な子との関係が「向かい合う」ものになっていないだろうか。保育の基本に戻って振り返ると、その関係は変わってくるかもしれない。

おわりに

○先生方の「今の苦勞」は、決して無駄ではない。多様な子どもたちが集まるクラスで育つ経験は、大人になった彼らが「いろんな人がいるんだ、まあいいか」と受け入れ、多様な人々が共に暮らす社会を生き抜くための「折り合いをつける力」を育んでいくと考える。

○もし、担任している子どもたちが、みんな同じような子どもだったらどうだろうか。いざこざは起こらないかもしれないが、そのような中で育った子どもたちが、20年後の多様な社会を生き抜けるだろうか。今の先生方の苦勞は、きっと20年後、花を開くということを想像してみしてほしい。

○私たち大人が一人一人、「共生社会」を自分の言葉で説明できることが必要だと考える。「みんなが大人になる頃は、こんな社会であってほしいんだよ」ということを、子どもたちに伝えていきたい。

こちらの【しつもん】は、久保山先生のお話の冒頭に参加者のみなさんに尋ねられたものです。
今回、ニュースレターを読まれて、「気になるあの子」のことをちょっと思い出してみてください……

【しつもん】

「気になる子」を1人、思い浮かべて下さい。
「その子(〇〇ちゃん)は、どんな子どもですか?」ときかれたら、どう答えますか?一言で書いてみませんか。

【しつもん】

その子(〇〇ちゃん)は、朝、家を出るとき今日、園で何をしようと思っていたでしょうか?

【しつもん】

その子(〇〇ちゃん)は、先生にとって
・何かをなおす必要がある子どもですか?
それとも
・そのままを受け入れたい子どもですか?

「できる できない」「〇 or ×」ではなく…

「好きだなあ!」「おもしろいなあ!」 ※久保山先生講義より

という気持ちで見守り、「あの子と私」の安心できるつながりをつくっていききたいですね。

参加者のアンケートより

・久保山先生のお話から、日々の保育の見直しと、気になる子への関わり方を振り返るとてもよい機会となった。子どもを変える視点でなく、保育者が変わることを意識したいと思った。子どもとの関係性を丁寧に築いていく保育をしていきたい。

・「できないことをできるようにするのはなく、その子の今できることを伸ばす。」この言葉をきいて、子どもがやってみたいことをたくさんやらせてあげて実現したり、心を動かす遊びを思いっきり楽しめる環境を作っていきたい。

・子ども一人一人の好きなこと、得意なことを保育の中で見つけたり、引き出していけるよう、その子の「よさ」が発揮できるような保育、クラスにしていきたい。

・気になる子に対して、「なんとかしてあげなければ」「どう支援していけば…」と考えがちでしたが、久保山先生の「療育の専門家になる必要はない」という言葉を聞き、これからの保育を考えていきたいと思う。

・自分の考えや子どもへの眼差しを、柔らかく、余裕のあるものにしていききたいと思う。子どもの姿を肯定的に見る視点や、少数派、個人への視点を大切にしていきたい。

・どうしても見えやすい「評価」とらわれてしまいがちになってしましますが、それは本当に必要なものなのか、子どもを主体としているのか、ということを考えさせられました。共生社会を生きていく中、今、保育者ができることは、保育者の少数派への関わりだと思うので、モデルになれるよう常に意識していきたい。

・久保山先生のお話は、支援の必要な子どもだけでなく、全ての子どもに通じることであり、人材育成の面では、大人（職員）に対しても同じ心もちで対応したいと思った。責め合ったり、悪いことばかりに目を向けるのではなく、子ども、大人関係なく、全ての面でインクルーシブな世界をみんなでつくっていききたいと思う。

・子どもも失敗することもある、大人も失敗することもある……失敗やできないことを緩やかに受け止める。そんな職場にすることが、子ども一人ひとりの違いやよさを認める園になるのかな……と振り返る機会となった。



乳幼児教育の質の向上 ニュースレター

朝来幼稚園公開保育を実施しました。

参加園・校

中保育所
池内幼稚園
志楽幼稚園
岡田こども園
シオン幼稚園
橘幼稚園
ルンビニこども園
うみべのもりこども園
朝来小学校
志楽小学校

倉梯幼稚園
さくらこども園
昭光保育園
タンポポこども園
舞鶴こども園

朝来幼稚園において公開保育を行いました。園長先生のご挨拶の中では、「遊びは学びの第一歩。遊ぶことは学ぶこと。こども達が主体的に遊ぶにはどうしたらよいかと、日々環境構成を考え模索してきた。こども達は何を望んでいるのか、どのようにしたら学びが深まるのか。寄り添ってよさを認め次にどうするのかは、教師の感性が大切であると考えている。質の高い保育とはどういうことなのかを参加者の皆さんと一緒に学んでいきたい。」と、今回の公開保育をきっかけに、職員一丸となって保育の改善に努力されてきた思いが感じられました。

今回は、複数年に渡り指導いただいております、和洋女子大学の田島大輔先生をお招きし「環境を通して行う保育（遊び）の中にある試行錯誤することもと保育者の意味」についてご指導いただきました。

乳児クラスの様子

田島先生の
助言より

〇興味のあることから何度も試したくなる

安心できる人、場所

〇乳児、特に0歳はこどもが発信してからの応答を大切に



好きな玩具を持って、安心できる保育者とやりとりを楽しむ様子が見られました。丁度つかまって歩ける高さの台を用意してもらい玩具に触ったり、伝い歩きをしたりして楽しんでいました。独り歩きが楽しいこどもは、指差しをして欲しい棒を手に入れ、廊下で棒を床に器用にすべらせ小走りすることを楽しんでいました。

自分で遊びも場も選ぶ

〇2歳児は、どこでもごっこ遊びが楽しめるように、持ち運びできるマットや、敷物などを用意するとよい。

〇保育者は優しくこどもに寄り添っている場面が多かった。今後は、このような意図で、こう関わろうと自覚的に関わるとさらによい



テラスに行った一人の0歳児は、2歳児が砂場で遊んでいることに興味を抱き、一緒に砂に触って感触を楽しんでいました。1歳児が0歳児の保育室で、また2歳児が1歳児の保育室で遊ぶ姿があり、同じ乳児のクラスとしてクラスを超えて、保育者同士がこどもに関わることを大事にしている様子が見られました。

2歳児の保育室では、毛糸や様々な素材を自分なりに見立てて、場を共有しながらそれぞれで黙々と遊ぶ姿が見られました。1歳児は、こどもの興味に応じて小さなコーナーで区切られており、保育者と一緒に簡単なやり取りする場面がありました。



1歳児と2歳児のテラスにはそれぞれ、転がして遊ぶ手作り玩具が設定されており、ボールやどんぐりなどの自然物などが置いてあります。1歳児は保育者に見守られながら、黙々と転がすことを繰り返し、2歳児はそれぞれで転がすことを楽しみつつ、友達とも場を共有して、集中して繰り返している姿が見られました。

環境はこどもの姿を見て、再構築を！

秋の自然物や、ペットボトルの容器などがこどもの手の届きやすいところに準備されており、こども達はそれぞれ気になった素材や道具を手に取り、保育者や友達と関わったり、自分で繰り返し試したりする様子が見られました。保育者と一緒にジュースを買いに行くなどのごっこも楽しんでいました。

〇遊ぶ場所の広さ、年齢発達、素材の大きさ、種類など、こどもの遊ぶ姿や天候などを見て、臨機応変に対応するとよい。

テントに溜まった雨水を落とす保育者に応援の掛け声をかけていた2歳児は自分達もスコップを持って、保育者と同じことを模倣する様子が見られました。



幼児クラスの様子

ホールでは、4歳児を中心にコンサートごっこが繰り広げられていました。ステージに立って歌って、踊っている子、カメラマンになりきって、カメラを操作する子、レフ板を持ってる照明係、取り仕切る総合マネージャー、応援する観客。バックヤードの係とそれぞれが自分のやりたいものになって一緒にコンサートを楽しんでいる姿が見られました。タブレットを持っている参加者の先生に、マネージャーが「撮影お願いします！（笑）」と巻き込む様子も見られました。

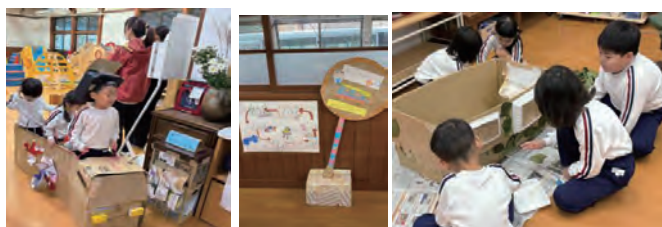
みんなが主役！それぞれの自己発揮！

○歌って踊っているだけではない、それぞれがやりたいことで参加していてそれぞれが主人公。

○バスに乗って運転している子どもだけが楽しんでいるのではない。バスを修理したり、バス停を作っている子どもも主人公。



ホールのステージ横では、5歳児を中心に、バスの修理工場が運営されていました。電車ごっこから始まり、友達のアイデアで、バスごっこに変わってきて、異年齢も巻き込む大きなプロジェクトになってきた様子でした。園内の各場所に少しずつ増えてきたと思われる、バス停が設置してありました。また車体にどんぐりや葉っぱをどうしてつけようか何でつければいいのか、とみんなで相談して修理していました。



3・4・5歳児それぞれの保育室で遊びを振り返る時間がありました。5歳児のクラスでは、段ボールにどんぐりをつけようとかポンドやテープを使った、123（数えて）押さえたのに無理だった。落ちてしまったという話から、今度はグルーガンを使いたいという話になりました。けれど以前グルーガンで熱い思いをした子（グループワークでの担任保育者の話でわかりました）が「グルーガンは溶岩みたいに熱くて危ないからダメ！」「知っている僕しか使ったらダメ」など強い主張を繰り返し「でもやりたい」思いの子どもとやり取りが続いたり、どんぐりに芽が出ていてそれをどうしようかということや、バスがスピード違反していたから「2キロ（時速？）で走ってほしい」など思ったことや気が付いたことを自由に話しており、日頃から振り返りながら、遊んできたことがうかがえました。

4歳児はコンサートごっこや、色水ごっこでの気付きを話していました。ゼリーの感触について「ぶにぶにしていた」「卵パックから出す時にこわれてしまった」など気が付いたことを話していました。保育者はどのクラスもこどもの思いを受け止めたり、問いかけたり、共感したりして感じたことや考えたことを安心して表現できるように関わっていました。



いい考えたね
これからどうしたい？

何色と何色を
混ぜたの？



○興味のあることだから何度も繰り返し試したくなる。そこには環境がある。



4歳児保育室横のテラスでは、食紅を使った色水と、ポスターカラーで作った色水のそれぞれ変化を楽しんでいる様子が見られました。

透明度の高い食紅のところではきれいな色にしたいという思いが感じられました。ポスターカラーのところでは「〇〇みたい」と何かをイメージして楽しむ様子が感じられました。スポイドが用意されていることで少しずつ量を加減しながら色水を落としていました。



また保育室では、ホールに行く前のアイドルが、相談やリハーサルをしていました。4歳児ならではのこだわりで集中して小道具づくりをする子どももいました。



3歳児は、ホールのバスごっこに乘客として参加したり、保育室に限らず好きなところで過ごす様子が見られました。保育室のままごとのところでは保育者が一緒になって、遊ぶ中でやり取りをしたり、子ども同士をつなぐように関わる姿がありました。

今まで遊んできて段々と大きくなっていった道路遊びのシートでは箱で電車を作って見立てたり、ブロックをつなげて電車に見立てたりと自分なりの楽しみ方で遊ぶ姿が見られました。お店ごっこでは3歳児なりに「いらしゃいませ」「ペイペイも使えるで」となりきることを楽しんでいました。



年齢発達によって保育室のコーナーの大きさを配慮

○秋から自然物などいかして作るコーナーを充実させていき、保育者が作りたいものを見せて、提案していくとよい。

グループワーク・田島先生の指導・助言より

今日のテーマ『環境を通して行う保育（遊び）の中にある

試行錯誤するこどもと保育者の意味』

あそびはまなび
の第一歩！



どう関わったらいいのか？先生の
試行錯誤が質につながる。そして
やっている意味を可視化して保護
者に伝えることが大切。

どんなこどもに育っ
てほしい？



○試行錯誤するのはこどもだけではない。保育者も試行錯誤する共
主体が大切。時代とともにパラダイムシフト（それまで当たり前と
されていたものの見方や価値観が根本的から変わるほど激変する）
している。

こどものままごとを見ていても、電子決済を真似たり、カメラもス
マホの自撮りになったりしている。

○OECDラーニングコンパス2030では知識の定着ではなく得た知識
を活用して自分はこうしていきたいと思えるこどもの育成を記して
いる。

○学習指導要領の改訂に向けて、現代社会では自ら課題を見つける
ことができないことが課題と言われている。自分はこうしていき
たい！自分でやりたくてやってみたと考えるこどもに育てほしい。

乳幼児期に何を育てていくか

○乳幼児期の育ちの結果はすぐには出ない。

○大切なことは受容と共感であり、それが土台にあり、こどもと関
わり、こどもの姿を見て、「やってみたらどう？」「こっちとこ
ち入ると面白いかな」「ここはこういうふうにするといいかも
ね」「どうしようとしたの？」などそこから提案していくとよい。

○試行錯誤や応答するためには環境が大切であり、環境があるから
応答ができる。

○こどもは、「～しましょう」の中では育ちにくい。だから、自ら
関わられるよう環境や状況を作っていく。

○心が動くことをその子なりにやれたそのプロセスが大事。

公開保育を振り返るのアドバイス

○乳児、特に0歳児はこどもがやったことに対しての応答が大事。

こどもが動いたら呼び寄せるのではなく、そばについてやることが
大事。0歳児がテラスに出て、2歳児の砂場に出してもらっていた。
こどもが遊んでいる（何かやっている）そばにいて見守ることも大切
な関わりである。

○1歳児のころころ転がしは、アンパンマンのボール入れと、透明
なペットボトルが用意してあった。1歳児には少し難しいと思われ
るので、もう少し単純にして半分に切りボールが手に取れる方がよ
いかも。同じテラスに、2歳児のころころ転がしも設置してあ
ったので、難しいのはそちらで体験するのもよい。

○保育室にテーブルが2つ出てあったが、今日は天候も悪く外に
出る子が少なかった。室内を広く使うためにテーブルを一つに
してもよかった。こどもの姿やその時の状況で、再構成すると良い。

○2歳児は園庭に様々な秋の素材やペットボトルが置いてあった。
次に考えることは、置いておくものの質。例えば、500ミリリット
ルのペットボトルが置いてあったが、大きさは？数は？そもそもペ
ットボトルは置くのか、などこどもの姿を見て再構成するとよい。

○2・3歳児も保育室の中にいろいろな場所でごっこが楽しめるよ
うに、マットや敷物（布）用いなど置いておくるとよい。

○4歳児の保育室の横のたたきで、色水で色づくりを楽しむ姿が見られ
た。そこにはスポイドが用意されており、こどもが少しずつ色を足して
試行錯誤を楽しむ姿があった。自由にやれる環境があるから自らが試し
たり、気付いたり、友達と応答することができる。教材を工夫すること
がこどもの探究につながる。

○幼児クラスは、ホールでステージごっこをするそばで、バスの修理工
場があって、修理していたり、それぞれが自分のやりたいことを友達と
関わり楽しんだりして、これこそ自己発揮と感じられる姿が見られ
た。その中で、男児がカブトムシの作り物を背負ってやってくる場面が
あった。大人から見て意味の分かることだけでなく、大人は分からない
けれど、こどもは分かっている。これがやりたい！という思いを持って
それを実現できることが大切である。



○5歳児の振り返りの時に鼻血が出た子がいた。すぐに「大丈夫？」と
声をかける子、ティッシュを取りに行く子、など様々な形で思いを表現
していた。しかし、何もしない子が関心を寄せていないわけではない
で、形式的なことだけにとらわれないことが大事である。

○5歳児の保育室で、一人で黙々と手裏剣を作っている子がいた。最近
手裏剣の折り方を覚えたらしく、手裏剣づくりにハマっていると聞いた。
この姿を一人でいて大丈夫なのかと捉えるか、手裏剣についてずっと探
究していると捉えるかなら、探究していると捉えたい。

○遊びに上下があるわけではなく、彼なりの充実感、満足感がある。そこ
を大事にしたい。

○こどもの思いに丁寧に耳を傾け、気持ちや意図、思いがけない遊びに
寄り添う。そうしたこどもを理解しようとする関係の中で、保育者も変
容していく。

○《内向けのごっこ遊びと外向けのごっこ遊び》について、例えば、5
歳児のバスごっこについて最初は自分達だけでバスごっこを楽しんでい
る。だんだん中身が充実しておもしろくなってくると、今度は、人に見
せたい思いが出てくる。それが外向けのごっこ遊びにつながる。2・3
歳児は2・3人が分かって遊んでいけばいい。そこに保育者が付
き合って楽しく遊ぶ。それが内向けのごっこ遊びの充実。そのために
2・3歳児は自分達で操作できる、どこでやってもよい、置いておける
ものなどを準備するといふ。この内向けのごっこ遊びが楽しく、充実し
ないと外向けにはならない。

○遊びの発展についてよく聞かれるが、誰にとっても発展なのか。上下、
できないでなく、遊びがその子にとって充実しているのか、満足
しているのかそこに価値を持ちたい。

★参加者のアンケートより～今後自分の保育に活かしたいこと～

- ・保育者が期待する方向に声掛けするのではなく、受け止め応答するということを意識したい。
- ・園のこどもの姿をじっくり見とりながら必要な環境を整えていきたい。
- ・「やりたい」「やってみよう」思いを大切に環境を工夫し、応答を意識したい。
- ・その遊びがその子にとって達成感や充実感を得ているかを考えたい。また、そのためにはどのような環境が必要か自分自身も探究したい。
- ・こどもが大人を気にせずに、自由な発想ができる保育をしていきたい。
- ・今まで遊びの発展ばかり、意識してしまっていたので、まずは、その子がどれくらい遊びに充実感や満足感を感じているのかを大切に保育していきたい。
- ・意図的に工夫された環境の中で、丁寧に育てられる「学びの芽」を小学校で更に成長させられるように努めていきたい。問いを持つ、粘り強く探究する、わくわくしながら学びをつなげるという姿を目指す時に、今日学んだ、環境づくり、教師の声かけ、指導者自身が試行錯誤すること、こどもを丸ごと受け止めることなど、いかしていきたい。

（アンケートより抜粋）

乳幼児教育の質の向上ニュースレター

余内小学校にて「第4回保幼小架け橋研修会～授業参観～」を実施しました

令和7年11月10日、市立余内小学校において、第1学年1組担任 藤崎このみ教諭に、国語科「じどう車くらべ」の授業を公開していただき、5歳児担任保育者を対象に、小学校での学びについて理解を深める研修会を開催しました。

国語科の1時間の授業の中で、1年生が「読む活動」「書く活動」「話し合う活動」を通して、「トラックのしごととつくりを読み取る」学習をする姿を参観しました。また、授業者から学習のねらいやそのための手立てを聞き、グループワークを行う中で、小学校での教科の学びについて、理解を深めていただきました。

授業では、子ども達が自分の目当てを決めたり、自分でワークシートを選択したりすることで「やってみよう」の気持ちを高めている姿や、自分の経験と結び付けて考えたことを書いたり自分の言葉で話す姿、子ども達の考えたことを温かく受け止める教師の言葉がけや友達の話聞く姿など、自分の学習として主体的に取り組む様子がたくさん見られました。

参加された皆さんからは、架け橋期を一体的に捉え、学びをつなぐことを意識した保育・教育の実践が心げたいといった感想が聞かれました。



【研修会内容】

- 1 第1学年1組
国語科「じどう車くらべ」授業参観
- 2 授業者から
- 3 グループワークと報告
「架け橋期をつなぐ」
- 4 まとめ

参加園

やまもも保育園
中保育所
朝来幼稚園
永福こども園
岡田こども園
さくらこども園
シオン幼稚園
昭光保育園
相愛こども園
平こども園
橋幼稚園
タンボポこども園
なかすじこども園
中舞鶴幼稚園
東山こども園
ルンビニこども園
うみべのもりこども園
舞鶴こども園
池内幼稚園
志楽幼稚園
ひばり幼稚園

～授業参観・グループワークから～

架け橋期の育ちや学び
～園でも 小学校でも
大事にしたいこと！～

- 遊びでも学習でも、こどもが主体的に取り組む
- こども同士のやり取りをする中で考えが深まる
- 園で経験してきたことを学習の中にいかしていく
また、小学校での学びを見通して経験していく

学級全体で本時の目当てを確認したあと、自分の目当てを決めたり、自分でワークシートを選択したりすることで、「やってみよう」の気持ちを高めていました

【導入でのこどもの学ぶ姿】

たくさんの参加者に囲まれて、こども達は緊張気味でしたが、これまでの学習を受けて、本時で学習する目当てを学級全体で確認した後に、自分がこの時間にがんばりたいことを「自分の目当て」として書き、学習へのモチベーションを高めていました。

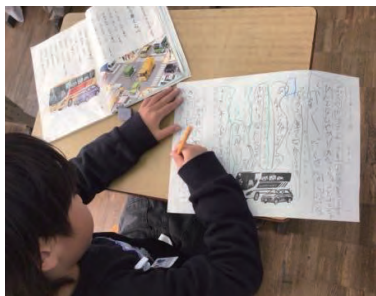
また、ヒントのあるワークシートとヒントのないワークシートの2種類のワークシートが準備がされ、どちらを使うのかを自分で選んでいました。

【自分で読み取る姿】

教科書の言葉を手がかりに「トラックのひみつ（しごととつくり）」について、わかることを自分の経験と結び付け、自分の考えを書き込みました。

先生は、一人一人を見て回り、困っている子の相談に乗ったり、一人一人の考えを把握したりしました。

自立心



※ 写真は公開日以外のものも使用しています



思考力の芽生え

自分の考えを持つための「書く活動」では、自分の経験と結び付けて、「トラックのひみつ（仕事とつくり）」を自分の言葉で書いていました。

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

「話し合う活動」では、自分で読み取ったこと（トラックのひみつ）を経験と結び付けて一生懸命に話したり、友達のわかったことを自分の考えと比べながら聞き、自分の読みを広げたり、深めたりしていました。

また、自分の考えを話すことや友達の話を聞くことに夢中になる姿が見られました。

言葉による伝え合い

思考力の芽生え

協同性

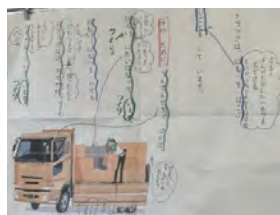
【友達とともに学び合う姿】

自分の読み取ったことを、友達に聞いてほしいと話します。
黒板の挿絵を使って話す姿も見られました。



経験を元に自分で考えたことと友達の考えたことを、比べながら聞く姿が見られました。

担任は、一人一人の意見を肯定的に受け止め、板書したり子ども達に言葉を返したりしました。



※ これまでの学習を振り返ることができるよう教室に残していきます

【自分で振り返る姿】

今日の学習を振り返り、確かになったこと、気づいたこと、まだわからないこと、自分の目当てについてなど、書くことで整理をしました。

藤崎教諭の話から～抜粋～
【入学からこれまでに意識してきたこと】

- ・学級には、出身園からの入学が1名の子もいれば、複数いる子もいるので、入学時には、どの子も安心して過ごせ、友達と関われるように心がけた。
- ・幼児期の学びである遊びの楽しさを、小学校での学びの楽しさにつなげたいと思い、「楽しそう」「やってみよう」「知りたい」を大事にした。主体的に学べるように心がけてきた。

【「じどう車くらべ」の学習で大事にしたこと】

- ・1年生の説明文では、「とい」と「こたえ」の内容を読み取ること、その文章の構造が分かることが、学習の中心になるが、それだけでなく「じどう車がすき」な子も多いので、「じどう車くらべ」の単元でも、自分なりに自動車に関わり知っていることやそれぞれの経験などと結びつけて読んでほしいと思い、学習を進めてきた。
- ・本時は、「トラックのしくみ」を仕事とつなげ、「こんな風になっているんだ」と考えることをねらいとした。（思考力の芽生え）
- ・まだ、一人で読むことに自信のない子もいるので、ワークシートを2種類用意して、選べるようにした。自分の目当てを立てることも大事にしている。（自立心）
- ・話し合いでは、自分の考えを書いて話し合いをしているが、単なる発表にならずに、みんなで学び合うようにしたいと思っている。（言葉による伝え合い）
- ・一人一人の意見を大事にしたいと思い模造紙に書いたり、言葉を返したりしたが、緊張して教師が多く話をしてしまった。
- ・公開授業を機にこれからも子ども達と一緒にがんばりたい。

子ども達が一人で学習する姿とみんなで学び合う姿や、主体的に学ぶことができるようにする手立てや教師の一人一人の考えを受け止める姿勢と温かい言葉などから、小学校での学びの援助について理解を深めることができました。

～参加者の感想より～

○ 日々の保育でも大事にする生活経験は、授業の中でも大切だと感じました。子どもから生まれた疑問を先生がすぐ答えるのではなく、子どもに返してみんなで考えたり、「なぜ」「どうして」や自分の思いを共有する場を設けることで、会話ややり取りが活発になっていると感じ、よいなと思いました。

疑問を解決するために、生活経験を元に考えている姿がよく見られたため、園での遊びの充実や興味・関心を持てる環境づくりを大切にしていきたいと思います。また、子どもの反応を受け止めたり、思いを認め、自己表現を安心して行えるような関わりを行ってきたいです。

○ 授業の中に選択肢がたくさんあり、子ども達が無理なく学べると感じました。また、子ども達の意見を聞いて、自分は思いもよらない視点からの意見で、そのような豊かな表現を大切にしていかなければならないなと思いました。また、先生はそのことを逃さずしっかりと受け止められていて、子ども達も自信を持って意見が言える環境だと思いました。口に出して発表することが得意な子と自分の言葉を書いて表現することが得意な子があり、それぞれの表現の仕方をしっかりと認めたいと思いました。

普段している振り返りの大切さ、また、遊びの充実の大切さを実感し、今後、子ども達の一つ一つの遊びをいかに充実させ、いかに心に残るものにするか考えながら、環境づくりと一緒に思い切り楽しむことなど、大切にしていきたいと思いました。

○ 子ども達は身近なことや自分のこれまでの経験から学んでいくんだと改めて感じました。「自分が荷物たのんだ時どうやった？」など、身近な事柄とつなげた発問をされた時に、子どもたちがのびのびと意見を言う姿が印象的でした。また、「なんでトラックはにもつをはこんぶんだろう」「軽トラはどうなんだろう」など疑問を自分で見つけたり、それをみんなに伝えられる姿が素敵だと思いました。わからないことや不思議に思ったことなどを、みんなに聞いてみようと思える保育をしていきたいと思いました。



乳幼児教育の質の向上ニュースレター

「第5回保幼小架け橋研修会」を実施しました

I 部 架け橋活動を振り返る
II 部 各自の実践を振り返る

保幼小架け橋活動（以下架け橋活動）を振り返り、架け橋期の保育・教育の充実を図るため、第5回保幼小架け橋研修会を開催しました。

今年度も、各協力園校で、架け橋活動で期待するこどもの姿を、架け橋期（5歳児～1年生）の担任である保育者と教師が互いに理解した上で、「学びを深める 学びをつなぐ」架け橋活動にしよう、工夫して取り組んでいただきました。

I 部では、実践の中から、保幼小架け橋カリキュラムモデル園校として取り組んでいただいている三園校の架け橋活動について、橋幼稚園 大槻智美先生、うみべのもりこども園 出石真美子先生、三笠小学校 大北大地先生とともに、「学び（ねらい）」を明確にした実践について報告を行いました。

II 部では、今年度公開保育、公開授業をお世話になった園や学校の実践から、架け橋期に大事にしたいポイントを紹介しました。

各グループワークでは、「学び（ねらい）」のある架け橋活動とするための工夫や関わり等について、また、「学び」を意識した保育・教育実践について、交流を行いました。

今年度、架け橋活動や架け橋期に大事にしたい点について、自園・自校においても広げていただくことを期待しています。

参加園/校

朝来小学校 余内小学校 池内小学校 大浦小学校 岡田小学校
倉梯小学校 倉梯第二小学校 志楽小学校 新舞鶴小学校
高野小学校 中筋小学校 中舞鶴小学校 福井小学校 三笠小学校
明倫小学校 由良川小学校 吉原小学校 与保呂小学校
中保育所 朝日幼稚園 朝来幼稚園 永福こども園
岡田こども園 さくらこども園 シオン幼稚園 昭光保育園
相愛こども園 平こども園 橋幼稚園 タンポポこども園
なかすじこども園 中舞鶴幼稚園 東山こども園 ルンビニこども園
うみべのもりこども園 舞鶴こども園 池内幼稚園 ひばり幼稚園



橋幼稚園、うみべのもりこども園、三笠小学校の保幼小架け橋活動～実践報告より抜粋～

橋幼稚園、うみべのもりこども園、三笠小学校では、毎回、事前の打ち合わせで、子ども達にとってどのような学びが期待できるのかを明らかにし、そのために創意工夫をして架け橋活動に取り組まれました。「学び」を意識することで、いつも異なる集団の中でも自己発揮する姿が見られたり、こどもの新たな一面が見られたり、普段接していない友達の考えを聞くことで新しい考えが生まれたりするなど、子ども達にとって「互恵性」のある活動になりました。

また、保育者・教師にとっての「互恵性」として、架け橋活動での活動内容、環境の工夫、言葉がけなど、保育者・教師自身が学べたことを、日々の保育・教育実践でも意識されていました。

期待するこどもの姿

- 5歳児 自分の思いや考えを自分の言葉で伝え、友達の思いや考えを聞き、さらに考えたり工夫したり試したりしながら、友達と一緒に意欲的に遊ぶことを楽しむ。
- 1年生 園児と関わる活動を通して、自分の考えを伝えたり相手の考えを受け入れたりする中で、協働して主体的に活動に取り組む。



◎ 主体的に楽しむ 試行錯誤する
思いや考えを言葉で伝え合う
架け橋活動にしたい

◎ 自園・自校以外の5歳児や1年生から
影響を受け合う架け橋活動にしたい

7月 ドッジボールあそび

ねらい

子ども達が自分達で考え、相談して遊びが進む
自園・言葉以外の友達のすごいところを、言葉で伝えたり聞いたりする

こどもの興味・関心をいかす

学びを引き出す関わり

他園校の5歳児や1年生を意識できるように言葉がける

こどもの気付き

を待って、5歳児・1年生と一緒に相談する

5歳児が「1年生とドッジボールをやりたい」と言ったことから計画された「ドッジボールあそび」。園校紹介の後、「違う園や学校の友達がボールを投げたり受けたりする姿から、すごいな、カッコいいなを見つけよう」と見通しが持てるように言葉がけることから始まりました。

園校対抗のドッジボールでは、普段のように自分達で外野を決める姿や、負けてしまい自然に作戦会議を開き気付いたことを伝え合う姿が見られました。

また、子どもから人数が違うことに気付くことを待って「どうする？」と問いかけられました。そして、子ども達から意見を聞き出され、各園の5歳児、1年生が半分に分かれ、全員でドッジボールすることに決まりました。

振り返りでは、子ども達は、「ねらいを定めてボールを投げた」「○○ちゃんの投げ方がよかった」「ジャンプしたり足をパーにしたりしてよかった」等の感想を伝えました。進んでいた保育者が名前が出てきた子のもとにも行ってコツを尋ねると、嬉しそうにジェスチャーを入れながら話す姿が見られました。自園・自校以外の友達のことを知ったり興味を持ったりするきっかけになりました。

まんなかのせんまでいって
なげよう

ボールをよくみて
にげよう

あいてがねらいにくいように、うごきまわったほうがいい

自立心

10月 するするビューン 1回目

ねらい

5歳児：チームの友達に分からないところを聞いたり教えたりして「するするビューン」を作って遊ぶことを楽しむ
1年生：チームの5歳児に分からないところを教えながら「するするビューン」を作って遊ぶ

学びを引き出す関わり

他のチームから工夫を聞き、新しい視点に気付くことができるように、途中でインタビューを入れる

一緒に活動する

チームの5歳児や1年生に分からないところを聞いたり見たりして作り、試行錯誤して滑らせて遊ぶことができるようにグループ活動を取り入れる

学びを引き出す関わり

はじまりの会で、後でチームで取り組んだ滑らせる工夫を、実際に見せながら聞き合うことを伝え、ねらいを共有できるようにする

11月 するするビューン 2回目

ねらい

5歳児：チームの友達とやり取りしながら、考えを出し合って作ったり、工夫して滑らせたり試したりして遊ぶことを楽しむ
1年生：チームの5歳児と考えを出し合って作ったり、思うように滑らせる工夫をいろいろ考え試したりする

環境の工夫（教材）

滑らせる糸の種類、角度の設定、重りの活用など工夫し、試行錯誤できる場所を1回目より多くつくる

秋の架け橋活動は、1年生が図工で作って遊んだ「するするビューン」に取り組まれました。

【事前の打ち合わせ】

事前の打ち合わせでは、「校舎や階段など高低差が大きく取れる学校で滑らせると、ダイナミックな遊びができそう」「角度などで遊び方の工夫ができそう」「グループで一緒に作るのも楽しそう」「グループで作る前に一人一人が作って遊ぶほうが5歳児も自己発揮できそうだね」など、意見が出されました。そこで、1回目は、チームに分かれ個々に1つずつ作り滑らせて遊ぶ、2回目はチームで1つ作り滑らせて遊ぶことに決められました。

【するするビューン 1回目】

1回目は、チームの友達とやり取りしながら、分からないところを教えてもらって作ったり、滑らせたりすることを大事にしたいと考えられました。保育者・教師の後押しがあり、だんだん打ち解け、自分から関わる姿が見られました。

こども達の多くが、時間をかけて工夫して作っていました。けれど、滑らせる遊びの方に時間がかけられなかった様子も見られました。



かわいいくちをつけたよ

協同性



あれ、とちうでとまった



おもったんかな

思考力の芽生え

【事後の振り返り】

事後の振り返りでは、

- ・作るイメージは持っていたけれど、滑らせて遊ぶイメージを持ちにくい子がいたり、材料が豊富だったので作ることに時間を多く使ったりして、滑らせる工夫に十分な時間が取れなかったのではないかな。材料をしぼってみたいはどうか
- ・今回は、制作の途中にインタビューをして、作る工夫について自分の言葉で話し、チーム以外の友達に広げられたのは、よかった。次回は、滑らせる工夫をしているチームにインタビューをしよう



こどもの姿から学びを共有し、よかったところもそうでなかったところも話し合っ、次回にいかす事後の振り返り

- ・チームの中で、より関わりが持てるように、言葉をかけよう
- ・より滑らせる工夫を自分たちで考えて試行錯誤できるように、会場となる三笠小学校体育館で、もう一度打ち合わせをしよう

架け橋活動を振り返って

◎ 年齢や経験が違っても子ども達が集まる架け橋活動は、こども達にとって様々な刺激を受けるよい機会だと実感しました。事前・事後の打ち合わせでは、5歳児も1年生も自己発揮でき、自分で試行錯誤することに加え、他園校の友達の気付きからもアイデアを得て試行錯誤ができるようにしようというねらいを共有し、皆で活動や環境の工夫をしっかりと考えました。日頃の保育でも、同じように意識しています。

◎ 普段はどちらかと言うと控えめな性格の男の子が、架け橋活動の中では、たくさんの人達の前でもしっかりと自分の思いを言葉で伝える姿に、驚きました。日頃の保育の中でも、そういう場を大事にしたいと思い、みんなの前で自分の思いを伝えることができるような時間を設けるようにしました。今後も、継続していきたいです。

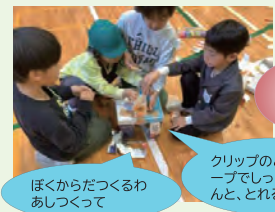
◎ 架け橋活動では、こどもの気付きを引き出す言葉がけをすることを意識しました。日頃の学習でも、特に生活科では、こどもが気付きを言語化することで、気付きを自覚できるようにしています。また、その気付きをいかす学習計画にしています。

【するするビューン 2回目】

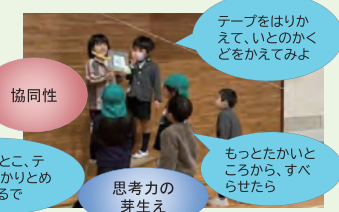
2回目は、こども達がめあてをしかり意識できるように、「チームで作成したり、滑らせたりしよう。そのために、手伝う、相談する、聞き合うなど、協力しよう」と強調されました。また、協働しを持たせようと、「振り返り、こんな風に滑らせたいなと思って、チームで工夫したことを紹介し合おう」ということを伝えられました。

前回チームで相談したものを、早速、作り出すこども達。意見のまとまらないチームには、保育者や教師がやり取りのきっかけをすることで、相談したり、役割分担をしたりして作っていました。

作れたチームから滑らせる場所に行き、作ったものに合うイメージを持ちながら滑らせる工夫をしていました。



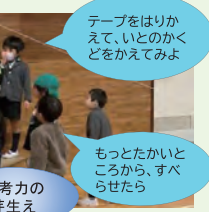
ぼくからだつくるわあしつくて



協同性

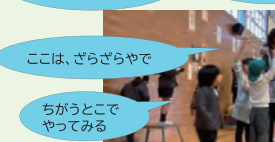
クリップのとこ、テープでしっかりとめんと、とれるで

思考力の芽生え



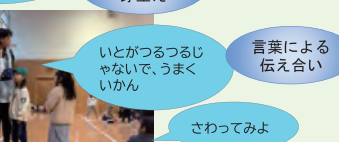
テープをはりかえて、いとのかくどをかえてみよ

もっとたいところから、すべらせたら



ここは、ざらざらやで

ちがうとこでやってみる



いとがつるつるじゃないで、うまくいかん

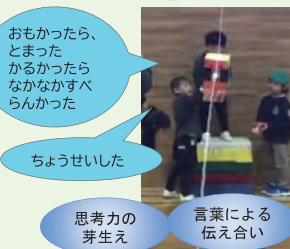
言葉による伝え合い

さわってみよ

自分の言葉で工夫を伝えてほしい、新たな視点を持ってほしいと、途中でインタビュー

振り返りでは、こども達は、自分の言葉で滑らせる工夫について話しました。紹介の時にクリップが取れて、上手く滑らなかったチームがありましたが、みんながその場で考えを出し合っ、滑り切るまで試行錯誤を繰り返す姿も見られました。

聞いているこども達も、糸の角度や材質、滑らせるものの大きさや形、クリップの位置などについて、自分達のしていた工夫と比べながら、気付きを確かなものとしていました。



おもったら、とまった

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

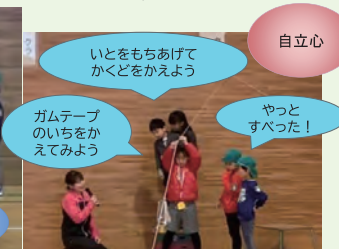
かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな



いとをもちあげてかくどをかえよう

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

かんたんかな

滑る様子を見せた後にインタビューをして、気付きや工夫を全体で共有する振り返り

乳幼児教育の質の向上ニュースレター

相愛こども園で公開保育を実施しました

相愛こども園において、公開保育をおこないました。相愛こども園では、こども達一人一人の思いに寄り添いながら、「おもしろそう」「やってみたい」という気持ちを大切に日々保育されています。今回の公開保育をきっかけとし、こどもの姿から遊びの環境を見直し、試行錯誤しながら室内外の環境づくりにも取り組んでこられました。

公開保育後のグループワークでは、「やってみたい」と様々な遊びに夢中になるこども達の姿が共有されました。参加者がそれぞれに自身の保育を振り返りながら話し合いが進められ、参加者・実践者ともに学びを深める機会となりました。

講師には、神戸大学大学院教授 北野 幸子先生をお迎えし、一人一人のこどもの個性と向き合う保育実践の大切さなどについてお話しいただきました。私たち保育者が今一度、自身の保育を見つめ直し、これからの保育実践に向けて、あたたかく、心強いご助言をいただきました。

参加園・校

朝日幼稚園	東山こども園
朝来幼稚園	ルンビニこども園
岡田こども園	うみべのもりこども園
シオン幼稚園	舞鶴こども園
昭光保育園	八雲保育園
平こども園	中保育所
タンポポこども園	志楽幼稚園
なかすじこども園	明倫小学校

年齢ごとのこどもの姿とカンファレンスでの北野先生のコメントをご紹介します

相愛こども園では・・・

こども達が夢中になって遊べる環境とは...空間や素材はどうだろうか...職員間で話し合いを重ね、こどもの姿を丁寧に見ていながら、発達や興味関心に応じて環境を再構成してこられました。公開保育の様子からは、安心できる居場所で、大好きな先生や友達と一緒に、思う存分楽しむ姿が、園内外のあちこちで見られました。そのようなこども達の姿とともに北野先生からのコメントをお伝えします。

0歳児

月齢差の大きい0歳児ですが、ハイハイの子、つかまり立ちの子などそれぞれが楽しめるよう、発達に合わせた環境が整えられていました。手作り玩具は、感触や素材などが工夫され、見たり、触れたり、音を聞いたりして楽しむ姿がありました。大好きな保育者のもと、安心して過ごす様子がうかがえました。



～北野先生コメントより～

○知らない大人を見て、「泣きそうかな？」と思った時に抱っこしていた保育者がその子の顔の向きを安心できる側にゆっくりと変えたことで泣かなかった。この姿に、こどもが保育者に心地よさを感じていることや、大事にされていることがよく分かった。



これからのチャレンジ ～北野先生コメントより～

○滑り台では、坂を登って頂上からまわりを見たり、あえて立ったまま斜面を下る姿があった。坂の勾配や、坂を下っている時につんのめりそう、転びそうという感覚を全身で感じていた。そのような姿をとらえ、保育者が、擬音語や擬態語なども含めた言葉を添えていくとよいだろう。

○斜面で勾配を感じたり、穴があるから入れなくなったり、振って音がするからそれを聴いてみたりと、たくさんの探究の姿があり、体感しながら考えていた。保育者はその姿を認めたり、共感したりこどもの気づきや発見、考えたり、試行錯誤している姿を見つけることが楽しいという感覚でこどもと接してほしい。そうすることで、何を味わっているのか、何に気付いているのか、何にチャレンジしたいと思っているのかに気付くことができるのではないかな。

1歳児

保育室には、一人用のボールプールがありこどもたちの「安心できる場所」となっていたり、「ポットン落とし」は、長さや硬さなどの異なる様々な素材があり、くり返し試したり、考えたりできるよう工夫されていました。園庭では、落ち葉のカサカサした感触を楽しんだり、保育者や友達と身体を動かして楽しむ姿がありました。



～北野先生コメントより～

○保育者がこどもの目線の先を見ようとしている姿がたくさんあった。こどものことを知りたいという思いが、こどもに十分伝わっており関係性のいい空間であった。保育者の共感がこどもに届いており、こどもの表情やしぐさから信頼関係が築かれていることが伝わってきた。

○虫を見つけた子が『見つけたよ』といった表情で私（北野先生）の顔を見て微笑んでいた。日頃から、こどもの発見や楽しさに共感し、笑顔に応答するといったかわりを保育者がなさっていることが予測できた。

○こどもの幸せな表情や満足しているであろう身体表現がたくさんあった。ボールを蹴った後に、腰に手を当ててポーズをとることをくり返す男児の姿からも、認められて、受容されている様子が見て取れた。

これからのチャレンジ ～北野先生コメントより～(1歳児つづき)

○1歳児の探求する姿は興味深い。世界の不思議を全身で感じたり楽しんだりしている。保育者は、何に気づき、どのように感じ、考えているのか、その探究の内実の理解を深めてほしい。
○形や色、手触りについて、こどもが感じていることに共感するだけでなく、保育者が言語化し、認めたり、問いかけたりする言葉を添えるのもよいと思われる。
○保育者とのを介して遊んだり、関係性を構築しようとする姿があった。他児に「みてみて」と言葉をかける姿もみられた。保育者は、他児に話しかけようとするこどもを励まし、共感し、時に確認したり、言語化を支援することが望まれる。こどもが考えていることを一緒に楽しんだり、それを認めたり、深めたりしてほしい。



1、2歳児の保育室は増築されたことで、空間のゆとりも生まれました。このメリットをいかしながら生活や遊びの場が整えられていました。こどもの興味にもとづいたたくさんの遊びがあり、こどもが「自分で選ぶ」「自分で選ぶ」環境となっていました。

2歳児



保育室は、ままごとや病院ごっこ、電車ごっこ、5歳児さんにあこがれて始まった太鼓ごっこなど、こどもたちの好きな遊びがたくさんつまった空間でした。「注射しま〜す」とお医者さんになって診察したり、ごちそうを作って「どうぞ〜」と友達にふるまったりと、保育者や友達と一緒にやり取りしながら楽しむ姿が見られました。



～北野先生コメントより～

○こども達の姿を洞察して、思いをくみ取ろうとされており、それに基づき、環境を再構成されていることがよく分かった。豊かな環境があったからこそ、こども達はなりきってごっこ遊びを楽しんでいたのだと感じた。
○病院ごっこのコーナーでは、こども達だけでごっこ遊びが展開していた。注射器や聴診器、薬などがあったが、遊びやすくするために、こども自身が遊具を並び替えて整えていた。2歳児のごっこ遊びで、自分達で遊具を整える姿はあまり見られないが、保育者が、こどものために何をしたらもっと楽しくなるかを考えて準備されていたことから、そのような姿が見られたのだろう。

これからのチャレンジ ～北野先生コメントより～

○こどもだけでもいろいろと遊びが発展しそうなので、次はこども同士の関係性に着目してほしい。保育者が一緒に遊びながら、こどもの姿を見て遊びの場から離れても、こども同士の相互作用が展開するような「離れ際の援助」(こども同士で遊ぶ、役割を担う、どこまでこどもに任せるかなど…)を楽しみながら工夫してほしい。

幼児クラスでは、階段下のスペースを活用し、ライブごっこをしたり、廊下からも買い物ができるようにお店のレイアウトを工夫したりと、異年齢で関わりながら楽しめるような環境となっていました。

3歳児



保育室には、おうちごっこ、お店屋さんごっこ、車遊びなど、こどもたちの興味関心から始まった遊びのコーナーが工夫されていました。彩りを考えながら丁寧に弁当を作ったり、赤ちゃんに語りかけながらミルクを飲ませたりする姿など、なりきって遊ぶ姿があらこちで見られました。公開保育の日にはお寿司屋さんだったお店は、こどもたちの声を聴いて、その時々でアイス屋さんやケーキ屋さんにも変身します。「〇〇もいる」「〇〇作りたい」などと言いながらケーキ屋やお寿司など、保育者と一緒に遊びに必要なものを作ることを楽しむ姿が見られました。

～北野先生コメントより～

○回転ずしごっこや魅力的なお弁当、手作りのキッチン素材など、楽しくなるような工夫がたくさんあった。
○多様なこどもがいる中で、トラブルや怪我に対する配慮も考えながら、丁寧に保育されていることが見て取れた。

これからのチャレンジ ～北野先生コメントより～

○次に工夫するのであれば、でき上がっているものだけでなく、何にでも加工可能な素材(毛糸・フェルト・色紙など)を置いみてはどうだろうか。加工可能な低構造な素材が、こどもの発想を促すと考える。こどもの発想が引き出されるような素材を吟味し、こども達に任せることで、何を作るのかを保育者が楽しみにするとよい。
○遊びの中で保育者の意図と違うことや、予想外のことが出てくることを歓迎したり、楽しんだりすることも大切にしたいと考える。
○保育の中で安心・安全は大前提であるが、トラブルから学ぶこども達の姿もあると考える。自由度や葛藤がこどもを育てると捉え「次へのチャレンジ」としてほしい。



4歳児

「いらっしやいませー」という声が響く保育室では、こどもたちのこだわりがつまった「お祭りごっこ」が開催されていました。くじ引きや輪投げなどの遊びがあり「お店屋さん」と「お客さん」と自分達で役割を決めながらやり取りを楽しんでいました。「先生だけが特別に何回もくじを引ける」といったやりとりから、こども達が保育者のことを大好きなことがうかがえました。



～北野先生コメントより～

- 保育者が一人一人のこどもの姿を洞察し、大事にして、こどもを知ろうと努めておられる様子が伺えた。素材を吟味し、ストーリー性のある楽しい遊びが展開されていた。
- 好きな曲や好きな動き、好きな遊びが歓迎されている様子からも保育者が「一人一人の好きなことを大切にしたい」と願う気持ちが、こども達に伝わっていると感じた。



ふり返りの場面では… ～北野先生コメントより～

- ふり返りの場面では、友達の顔を見ながら丁寧に話をしようとして、質問を聞いたり、質問した子に伝わるようにしっかり目を見ながら、答えたりしようとするこども達の姿が見られた。
- 保育者は「他に質問は？」「自分で考えて、どうだった？」などと、丁寧に思考を促し、こどもが考える姿を大事にしていた。言葉による伝え合いを真面目にしようとしていたことが援助の姿として見られた。

これからのチャレンジ ～北野先生コメントより～

- 発言しているAちゃん、Bちゃんへの関わりは、一人一人の考えを掘り起こそうとする素晴らしい援助だった。次へのチャレンジとして、直接発言しているこども以外のこどもたちが、そのやり取りを「自分事」として捉える姿や、「おもしろそう！」「次は自分もやってみよう！」という意欲が育まれる様子につながるかどうかをみていって欲しいと考える。
- さらに、「今、直接話しているこども以外のこども達は、この様子をどう見ているのか？」「待っている間に何を感じているのか？」ということにも意識していくとよいだろう。



5歳児

保育室は、ケーキ屋さんや警察署、ネイルコーナーなど、こどもたちのアイデアがあふれ出す楽しい空間となっていました。色合いにもこだわったネイルや、チョコレートアイスの中の見えない中身にまで「クリームを入れる」という工夫など、一つ一つにこども達のこだわりが見られました。



～北野先生コメントより～

- 普段から自分の表現を認められていることで自信をもって「見て、見て！」と見せに来る姿があった。自分なりに納得いくまで遊び込む姿が見て取れた。
- 壁面の製作などは、保育者の大人の手（加工）が入っておらず、全てこどもが作っている。ケーキやネイルなども一つ一つが違って、見栄えを整えるための修正がないからこそ、こども一人一人の個性や「こうしたい」という思いがうかがえた。
- 遊びの場所や向きを柔軟に変え、こども達が没頭できる「コーナー」が構成されていた。こどもの様子を観察し、試行錯誤しながら環境を整えていることがうかがえた。



ふり返りの場面では… ～北野先生コメントより～

- こども達から「かわいい」「かっこいい」「すてき」といった他者を認める言葉が自然に出てきており、これはとても大事な姿だと考える。自分を肯定し、相手も尊重する心をどう育てていくかが大事であり、「認め・認められる」経験の積み重ねが、こども達の自負（誇り）と自尊感情を育む鍵となるだろう。

これからのチャレンジ ～北野先生コメントより～

- 次へのチャレンジとして、「素敵だね」という感想から一歩進み、「どこが」「どんなふうに」素敵だと思ったのかを具体的に考えてみてほしい。
- また、保育者が感じたことを、「ここは〇〇を工夫しているね」「この部分にこだわっているよね」などと、言語化し、認める支援があるとうれしいと思われる。
- 保育者がこどものことを「もっと知りたい」「教えてほしい」と思っていることは、こども達に伝わっている。それがモデルとなり、他者に「興味を持ち「人と関わることの楽しさ」が育まれていくと考える。これこそが保育の醍醐味だと考える。



ライブコーナー



ライブコーナーでは、自分の好きな歌を歌ったり、楽器の演奏をしたりと、異年齢で関われる素敵なスペースとなっていました。

グループワークより

3歳児のトラブルについて、グループワークの中で話題となった内容をご紹介します！

公開保育の様子では…

・先生がこどもの様子を見ながら遊びに入ったり、言葉をかけたり、トラブルの仲立ちをしていました。「どうしたらいいかな」など問いかけ、こどもが考えられるような言葉がけや関わりが見られました。

参加者から

- ・3歳児って遊びのなかでトラブルやいざこざが多い…どうしたらいいでしょう？
- ・まずは、「〇〇したい！」というこどもの思いを受け止めることが大事ですよ！
- ・玩具や道具の数、遊びの場にも工夫がいるのではないのでしょうか？
- ・保育者が仲立ちとなり、お互いの思いを伝えることも大切ですね。
- ・保育者が決めてしまうのではなく、「〇〇するのはどうかな？」と提案することを大事にしたいですね。



グループワークの中で先生方が話し合ってくくださったように、こどもは自分の思いが通らない経験を通して、「自分と違う考えをもつ人がいる」ということを知ります。これは、思いやりや共感性の基礎となる「他者の視点」を獲得するための第一歩です。

保育者に気持ちを代弁してもらい、受け止めてもらう経験を繰り返すことで、自分の感情に折り合いをつける力も育ってきます。

北野先生のお話にもあったように…

トラブルやいざこざは必ずしも悪いことばかりではなく、こどもの成長に欠かせない要素が含まれていると捉えてこども達を見ていきたいですね！

カンファレンスより

～誕生からどのような育ちが積み上がってきたかを見るこども観・教育観を大切に～北野先生コメントより

○今回の公開保育を通して、先生方の環境構成の工夫と、そこに至るまでの試行錯誤が伝わってきた。「〇〇なるように△△する」といった目的があり、そこへの援助の工夫が指導案に丁寧に書かれていた。

○インクルーシブな保育がなかなか進まないと言われる昨今だが、相愛こども園では一人一人の個性と向き合う保育が実践されている。物的支援が整い、こども達に安心できる居場所がある。そこにはこども達の『幸せな表現』が溢れていた。どのクラスもこどもの尊厳が守られていた。

○「国立教育政策研究所の幼児教育における保育実践の質評価スケール案」では、「保育者が（中略）歌や言葉遊びをしたりすることを支えている」という項目がある。今日もいろいろなところで、鼻歌を歌いながら遊んでいるこどもの姿があり、普段からそのような保育者の支えがあるのだろうと感じた。さらに、「教材やおもちゃ等で子供が保育者の意図とは異なる使い方をしても受け入れている」などの項目もある。保育者の予測と違うことが起こった時に「おもしろい！」と思える専門家であってほしい。

○小学校1年生を起点として見てしまうと、5歳児は「まだ〇〇できない」というような遅れや不足を探すような見方になってしまう可能性があるだろう。誕生からどのようなこどもの育ちが積み上がってきているのか、という見方ができると、その子の育ちの積み重ねという観点でこどもを見る教育観、育ちの観点、こども観につながると考える。



○指導案やドキュメンテーションは書いた後に見直す次の課題が見えてくる。何かができるようになることは悪いことではないが、「できた・できていない」の評価ではなく、「何に関心を持ったか」「どのように取り組んだか」等のプロセスを見ることが大切だと考える。

○一番の評価者はこどもである。保育の探究に終わりではなく、且指すべき高みに天井もないと考える。無理のないようにしながら、こどもを主語に保育を考えていきたい。

○こどもが遊び込めるように環境を再構成し続け、常にチャレンジしてほしい。保育者自身の楽しみややりがい、こどもの幸せにつながるのではないかな。

参加者からのアンケートより

- ・どのクラスも環境が工夫されており、こどもが選んで遊びやすく、やってみたいと思えるようになっていました。保育者は、介入しすぎずよいタイミングで言葉をかけて関わっておられる姿があり、学びになった。
- ・先生方が、こども一人一人の意思や思いを大切にしたい関わりをされているのが伝わってきた。
- ・グループワークでは、参加者それぞれの視点で話ができて、気づきも深まった。実践された園の先生とも話ができたり、思いや悩みなどを、保育者同士ではなしができてよかった。
- ・「何をしたら楽しめるだろうか」「何をしたらこども達は夢中になれるだろうか」という考えは学校で学習する場面でも言える。小学校でもこども達が選択しながら学習する方法を設定したり、やってみたいという気持ちを尊重した単元構想を考えたりして、園での学びを小学校でもつなげていけるようにしたいと感じた。

